

ツバルでの散歩中に…

1回生 村上智香

ツバルは治安が大変良い国である。外国という、一人での散歩に若干びびっていた自分であるが、ツバルでは、日本よりも安心して散歩ができた。



自分が散歩をしたのは、日曜日。キリスト信者が、ほとんどのツバルにとっては、安息日という、活動を休止するお休みの日である。お店などは休みであり、村はひっそりとしている。そんな中でもツバルで歩いていると、道行く人に笑顔で **Talofa** (こんにちは) と挨拶される。とにかく笑顔が素敵なのだ。こちらも自然と **Talofa** と口をついて出てくる。

この日自分は、滞在していたフォンガファレ島の南端まで歩いて行こうとしていた。南端といってもせいぜい5kmくらいである。30分ほど歩いた頃だろうか、あ、意外と遠いな、と思い始めた。そんな時、一人のイケメンなお兄さんから、どこに行きたいのか、と声をかけられた。ツバルでは結構な人がバイクに乗っており、このお兄さんも例外ではなかった。自分は **south** の最上級が思い浮かばず、ただ **south** と答えた。そうすると、反対方向に行こうとしていたお兄さんは向きを変え、乗せてあげよ、という素振り。今まで、バイクでびゅんびゅん飛ばしているツバルの人たちを羨ましいと思っていた自分は、躊躇せず、まったく知らない人の後ろに飛び乗ってしまった。日本では絶対に恐くてできない。**Which house?** と言われ、**No house. To look the sea.** たどたどしい英語で答える。バイクで飛ばしながら、ちょっと振り向いて親指を立てるので、肩に掴まりながら **Very good!!** と返す。いろいろと英語で喋るのだが、いかんせん英語ができない自分…。こんなときに人は、英語が話せるようになりたいと思うのだろう。そして、あっという間に、島の南へ着く。**Thank you** とお礼を言い、颯爽とバイクで去っていくお兄さんを見送る。

思いがけなく、ツバルで、人生初のデート(?) を果たしてしまった。これも、ツバルでは、自分が外国人であるからかもしれない。ちょっと振り向いただけでなく、バイクの後ろにまでも乗せてもらった異邦人である。日本を出ると自分が“外国人”である。当たり前前のことであるが、**Where are you from?** と聞かれまくる外国にそんなことを感じた。



The southernmost tip of Fongafale